

輸入ギアからの騒音

林 佩樺/遊墨設計+遊墨工房



Wild Gear Flower

日本に上陸する前に外で聞いた噂話です。

「日本の男は、仕事が終わっても真っ直ぐ家に帰らない。その理由は、早めの帰宅は会社で重責を任されていないことを意味するので、奥さんにバカにされやすい。だから、仕事が終わっても、同僚と飲み屋で時間を潰します。」

当時、日本に関して何もわかっていない私は、半信半疑でした。その後、念願の留学生生活を順調に送り、上記の噂は「そんなバカな！」という悪気のない冗談と見てしまっていました。

卒業前の最後の学年、卒業設計(あるいは論文)が大変な時期にもかかわらず、先輩たちは学校の外で就職活動を始めた。そして就職先が決まると、卒業ができないと困るんです、と訴える多忙な準卒業先輩たち。一番困っているのは指導の先生たちではないかと、私は思っていました。今も思っています。学校は学問の指導より、就職の斡旋の方が大事なのか、と違和感を覚えました。

後で知ったのは、会社側の新卒への執念です。そして、この国の人たちはミスも無駄もない人生が好みます。模範的な人生を、これまで何人の人生の先輩が、見本として見せてきたことでしょうか。それを疑問なく真似してゆくことが、成功への鉄則。成功への一直線の道には、高学歴と大手会社、終身雇用などの常用名詞が並んでいます。

Jessica Lin

1968年台湾・台北市生まれ。親日派の家庭に育つ。1994年より日本に滞在。
1999年京都の大学院修了・建築学専攻。大阪の建築アトリエ・西宮の設計事務所にて修行。
2002年仙入洋と遊墨設計設立。2004年入籍。2004年～現在地で遊墨設計+遊墨工房を運営。
2006年7月～大手建築設計事務所で派遣社員を兼務。

新卒の彼氏(今は夫になっている)は、順調に希望の会社に入社。「9時～5時」の神話は早々に崩壊し始めた。アフター5の電話を楽しみにしていたのに、11時になり、12時になり、次第に電話が鳴らなくなっていった。そして毎日のように文句を言い続ける私は、理解に苦しむ日々。「仕事の段取りが悪いのではないかとピークはいつ過ぎるのでしょうか?」と。

その結末は、週末のデートを失守するまで、何も変わらなかった。彼には「しかたがない、仕事だもん!」という免罪符がある。ここで賢明な女性は、邪魔をせず、そっと置き去るべき。「自分の人生は独りでも歩んでいけるじゃないか!」と、自覚するしか他に方法はありませんでした。

楽しい学生生活が終わり、私も社会人になりました。彼氏が遭遇していた状況を理解するのに、それほど時間はかからなかった。私が戦っているのは、仕事の量というより、時計の針でした。社内の先輩たちが帰宅する前に席を立つのは、「生意気」という無言のタグを貼られる恐れがあるので、帰宅するより6時以後の談笑の方がよほど益し、という仕事人の生態でした。

こうして私のキャリアライフは、朝の満員電車と終電後の閉まったシャッターが溢れる駅前の商店街となった。仕事の合間に時々、ビルの最上階に上がり、都会の小さな青空を見上げて、「こんな人生を望んでいましたか?」とため息をつくくらいでした。

個人の経験談をつらつらと書いてしまいました。けれど、これは決して特別な例ではなく、恐らくほとんどの方が体験している事実だと思えます。

「ちょっとした我慢をすれば、安定した人生は、そんなに悪くない」という見方もあるかもしれませんが。しかし、「もし、その我慢がぜ二しか生み出さないとすれば、それこそ無駄だ」と、私は反論したいです。

まず、勉強のこと。

人生の時間の大半を使ってしまふ、理由は何でしょうか? 今の私が言えるのは、それは自己実現のための一つの方法に過ぎないでしょう。自分を知り、周りの世界を知る。多くの場合、このような行動は学校で行う。けれど、学校でしかできないことではない、学校で終わるはずがない、と思えます。

高学歴は、個人の一種の趣味に過ぎない、とでも言えるでしょうか。個人の趣味を生き方で実現し、それが職業に反映するのは理想の形です。結論から言えば、勉強は、職業の道具を手に入れる手段なのです。就職への飛び石ではない。

子供から「何故勉強しなければならないの？」と質問された時、勉強してきた我々大人は、第一にどんな答えを教えたのでしょうか？

仕事・家族とお金のこと。

日本の「熟年離婚」が、外国のメディアでも取り上げられているようです。

仕事に没頭する忙しい日本の社会人たちへ。

「毎日の残業は本当にしなければならないですか？」

「毎月の給料入金以外に、家族とのコミュニケーションは、ちゃんと取れていますか？」

「お金をちゃんと入れたら、後は家に残った人の仕事だ！と安易な考えを持っていませんか？」

たとえば、明日、高額のお宝くじが当たったら、今の生活はどのように変わるかと想像してみましょう。家族がお金を望んでいない場合は、家族の一員として、自分はどんな役割をしているのでしょうか？

貧乏人は回転寿司しか食べられないかもしれないけど、お金持ちは特上トロ三昧しているんだ。しかし、味は如何であれ、誰と一緒に食べるのが大事だと思います。お金はある分だけ使います。量ではなく使い方でしょう。テレビでよくお金の話が出てくる「ちなみに、このブランドもののバックはいくらでしょう?!」確かにデジタル化した金銭感覚は分かりやすいですが、デジタル化した社会は、人情を量れません。

仕事の中身とオン・オフのこと。

仕事ができる人は確かに格好良いですけれど、24時間運転し続ける電器でも、たまにフューズが焼けちゃいます。

私の本業は建築ですが、業界用語で「あそび」という言い方があります。タイル割りや造作家具など、設計図でキチキチいっぱい詰めた場合は、「あそび」を入れないと現場では作れません。なんという優雅な言葉使いといつも感心してしまうのですが、現実の日本社会より、日本語の方が遥かに筋が通っています。

効率よく自分の能力と体力を使いましょう。「ド根性」は能力に入りません。かえって迷惑になる場合もあります。今の仕事内容と、小学生時代に作文に書いた夢は、どれくらいずれているのでしょうか？ その分は、自分が納得しているのでしょうか？ もしそうでなかったら、もう一度根気よく、自分のために、チャレ

ンジという不安定なリスクを楽しんで見てはいかがでしょうか？

先日、とある心理テストで遊んでいたら、私は「フリーター体質」の人間だったらしい。「束縛は嫌いで、マイペースで物事を進める。」

今、自称フリーターという人種が増えすぎて、社会問題になりつつある。はっきり言って、イメージはよくないですね。世間の目も厳しくなっている。それ以前に、日本の社会は、安定したサラリーマン以外、いい目を向けてくれません。私の友人は会社を辞めてから、住宅を自分の名義で賃貸すらできませんでした。大家さんの気持ちは理解できるつもりですが、その時点で、私は日本という社会の怖さ、あるいは不公平さを知った。

私が言いたいのは、人はそれぞれです。一種類ではないです。ちょっと寄り道をしたいチャレンジャーは、少し暖かい目で見守ってあげてもいいじゃないですか？ どこかの山奥の小径に、彼らにも花が咲かせるかもしれません。よりたくさんの方々の考え方を持つ人たちが共存できる社会を作り、それぞれ自分の役目を果たし、四季があるようにお互いの違いを楽しめば、人生はもっと豊かになるはず。

一週間には土曜日と日曜日があるように、無駄の無い人生の真意を、考え直して欲しい。人生は一回きりなので、楽しく生きて欲しい。家族に愛され、自己実現が満足している大人になって欲しい。

私が知っている日本の方は皆、優しく、我慢強いです。それと比べると、私自身のわがママが非常に目立ちます。けれど、身近な人には我慢せず、もっと人間らしく生きてほしいと願っています。

急いでいた足をゆっくりと落ち着けて、歩いてきた過去を回顧してみよう。その無駄な時間は、方向修正であり、充電であり、次に発車するときには、迷わず自分の行くべき駅を選び、到着までの時間を充実して楽しめれば、と思う。

そういえば、数年前から、不景気により日本社会は大規模なリストラを行っています。テレビカメラに映っていた、ネクタイを締め、かばんを持って、公園で一日時間を潰している解雇されたサラリーマンの姿が今でも忘れられません。会社は？ 家族は？ 個人は？ とすべての問題が、彼のかばんにいっぱい詰まっていたんだろう。

私が日本に来る前に聞いた噂ですが、今思うと、なんとなく皮肉な事実のような嘘でした。